あしもと通信

100

2021年9月発行

●巻頭言

今年の冬　地球の体温が決まる…

◆創刊号の巻頭言タイトル

「今年の冬、地球の体温が決まる…」

足温ネットのニュースレター『あしもと通信』第1号の巻頭言のタイトルです。ずいぶんと詩的ですが、1997年冬に京都で開催される「気候変動枠組み条約第3回締約国会議（COP3）」に向けた期待感があったのでしょう。

結成のきっかけは、前年ドイツで開催されたCOP2における市民運動の盛り上がりでした。市民側の全国組織として「クリマ・フォーラム」が結成され、政府や企業、財団などから資金援助を得ながら、10万人が参加する自転車パレード等を開催し、COP2を大きく盛り上げました。これに倣う形で日本でも「気候フォーラム」が結成され、江戸川区でも市民ができることをやろうと、区内在住の環境NGOメンバーらが集まり「気候ネットワーク江戸川ネットワーク（仮称）」実行委員会ができました。

そして、1997年1月に区内の公民館で「温暖化を考えよう！江戸川区民の集い」を開催し、「足元から地球温暖化を考える市民ネット・えどがわ」として活動を始めます。集いには、東京電力や東京ガスといったエネルギー事業者や自然エネルギー事業協同組合が参加し、小学生やサーファーからのメッセージもありました。最後に、家庭と地域でのアクションプランとして冷蔵庫から冷媒フロンガスの回収実演をしました。

当時、江戸川区内で排出される温室効果ガスの中で、最も多いものがフロンガスでした。温室効果がCO2の8千倍と言われるフロンガスを回収・処理すれば費用対効果が大きいと考え、最初の活動としてフロンガス回収プロジェクトに取り組むことになります。

◆地球の体温が決まる…

以来24年にわたる活動の中で、「地球温暖化」は「気候変動」に言葉を変え、アメリカや中国、途上国も参加する世界的な枠組み「パリ協定」が発効しました。産業革命以降の地球の気温上昇を1・5℃に抑えるため、2050年までに脱炭素を実現することが目標とされたのです。そして、8月に公表されたIPCC報告書は、このままだと2050年を待たず1・5℃に達すると警告しました。

今年のCOP26はイギリスのグラスゴーで開催されます。24年前の巻頭言のごとく「今年の冬、地球の体温が決まる」と言っても過言ではありません。既に世界では高温による大規模な山火事が頻発し、日本でも風水害によってたくさんの人の命が失われ生活が破壊されています。国連防災機関（UNDRR）によると、2019年までの20年間の災害数は7348件とその前の20年に比べて1・7倍にも増えているそうです。

この災厄から逃れるためには、急激な気候変動の緩和に向けて、石油や石炭といった化石燃料から再生可能エネルギーに転換する一方で、省エネルギーを一層進めて脱炭素を実現するしかありません。私たちは原発や火力発電に依存しない脱炭素社会の実現に向けて、初心に立ち返りつつ若い世代とも連携しながら前に進んでいきたいと思います。

あしもと通信も100号を迎えました。これを記念し、グレタ・トゥーンベリさんの活動から始まった世界的な運動体「FFF（Fridays For Future＝未来のための金曜日）」で活動する大学生と代表理事の奈良による対談企画を掲載しています。9千字にもおよぶ対話の中でどのような話がされたか、お読みいただければと思います。

（文責：山﨑求博　事務局長）

『足元から地球温暖化を考える市民ネット・えどがわ』
ニュース
あしもと通信
1
◇ 今年の冬、地球の体温が決まる… ◇

ホームページ　Facebook

●今号のコンテンツ

巻頭言・今年の冬、地球の体温が決まる…
100号記念企画対談「Z世代と足温ネット」
えど・そら便り
環境・エネルギー8行ニュース
本号の対談企画がテレビ取材を受ける～MXテレビ『堀潤のモーニングFlash夜のZ会議』／活動日誌／編集後記

Vol.100 記念企画

●対談 Z世代と足温ネット

―未来に向け、課題を語り合った9千字

●語り手
・奈良由貴さん(足温ネット代表理事)
・秋山菜々美さん(FFFメンバー・大学3年生)
●聞き手
・本橋恵一さん(メディア編集マネージャー)

1997年の設立から活動を続けること24年。いま足温ネットが抱える課題はズバリ次世代ー。これからを生きる世代のために何ができるか?何を引き継いでいけるのか?そこで、『あしもと通信』100号の記念企画としてZ世代との対談を企画しました。還暦を迎えた代表理事とFFF(Fridays For Future)で活動する大学生がお互いの活動について語りつくします。

ーまずは自己紹介からお願いします

●奈良:「代表理事の奈良です。今日の対談を楽しみにしていました。FFFの活動は知っていてもメンバーから具体的な活動を聞いたことが無かったので」

○秋山:「FFF東京に所属している秋山菜々美です。大学3年生です。市民電力は各地で活動していますが、都内で活動しているとは知らなくて、経済状況などを理由に活動が難しくなっている中で、どうやってここまで盛り上げてきたのか聞きたいです」

ー活動を始めたきっかけは何ですか?

●奈良:「きっかけは地域に仲間がいたことと気候変動に対するショックです。活動を始めるまでは、地球温暖化という言葉は知っていましたが、単純に温かくなっていいじゃないかとおバカに思ってました(笑)。地球温暖化は気候変動であることを知って、私は異常気象よりも食糧難が起きるのではと非常に危機感を感じたんです。そして、地域の仲間がCOP2での市民運動の盛り上がりについて教えてくれ、京都で行われるCOP3に向けて、江戸川区でも行動を起こそうということになりました。区内で最も排出している温室効果ガスを調べたら、CO_2の8千倍ともいわれる特定フロンであることが分かり、自動車解体業者と組んで末端での回収を始めました。そして、CO_2を出しているのは家庭よりも企業で、排出を減らすには企業が動かなければいけないことを知りました。その構造は今でも変わっていませんが、それでも続けてこられたのは、そうした構造を踏まえながら分かりやすい活動をしてきたからだと思ってます」

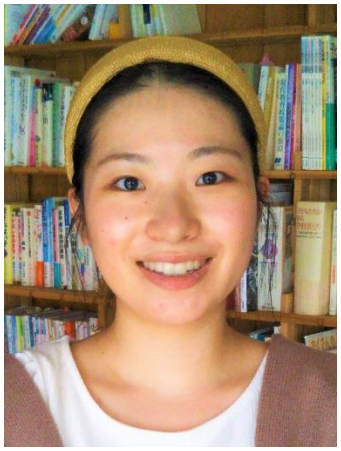
ー秋山さんはどうですか?

○秋山:「私の場合、原点はけっこう昔で父の実家が新潟県にあって、夏休みに遊びに行くと虫取りや川遊びをしていました。その時に、叔父から『昔はもっと川の水位があった』、『昔はヤマメとかたくさん採れた』と聞かされ、何故そうなっているんだろうと小学生の時に調べ始めるようになりました。大切な自然を守っていきたいとの思いから中学、高校と環境問題について調べていきました」

○秋山:「FFFはグレタ・トゥンベリさんの学校ストライキに触発された若者たちによって設立され、1・5℃目標の達成や迅速な気候変動対策、政策決定プロセスの公平性、若者の声の尊重を掲げて活動しています。私自身は9月に予定している世界気候アクションの議論に参加したり、グリーンピースジャパンが中心になった『ゼロエミッションを実現する会』に参加して、住んでいる文京区の区議会に請願を出したり、議員さんに呼びかけたりしています」

ー周囲の反応はどうですか?

○秋山:「まだまだ認知度が低いと感じます。市民もそうですが議員さんと話していても認識のズレや理解不足を感じま



■秋山菜々美さん(21歳)
創価大学 法学部法律学科3年
Fridays For Future Tokyo やゼロエミッションを実現する会に所属。
大学では、惑星政治・惑星平和学を学び、非人間の視点を入れながら、数々の地球的課題群に対してのアプローチを考えている。また、脱人間中心主義の社会構築のために、私たち人間は何をすべきか、また何ができるかを研究している。最近は、地域分散型での再生可能エネルギー導入や、交通の再エネ化など、エネルギー分野に関心を持っており、重点的に学んでいる。

■本橋恵一さん
Energy Shift 編集マネージャー
1994年より環境・エネルギージャーナリストとして活動。気候変動問題、電力自由化、原子力、市民運動などを取材・執筆。主な著書に「電力・ガス業界の動向とカラクリがよくわかる本」「スマートグリッドがわかる」「電力・ガス自由化の衝撃」「太陽光発電の「卒FIT」入門」等。
現在、脱炭素ニュースサイト「Energy Shift」で記事の執筆、編集をするほか、ユーチューブ番組「エナシフTV」で企業の脱炭素戦略分析動画を配信中。チャンネル登録お待ちしてます。

す。FFFの中で意識が高いメンバーたちと活動していますが、一歩外に出てみると『あ、何かやっているな』としか見られていません。もっと気候変動に対する意識を喚起していかなければと思っています」

ー足温ネットが長らく活動を続けてこられた理由は何でしょう?

●奈良：「今でこそ日本は失業者が増え、経済的にも頭打ちな上にコロナパンデミックで困っていますが、足温ネットを立ち上げた1997年当時はバブルの余韻が残っていて日本全体が今ほど困っていませんでしたから、気候変動に危機感を持てない市民との温度差を感じていました。そして、省エネなどを訴えても、少しの人にしか響かないなーと。それでも続けてこられたのは、メンバーが良い意味でいい加減で、タコツボに陥らず、面白いと思えることを楽しくやってきたことです。私は上の世代になるでしょうが、『分かってもらえなかった』との気持ちがずっとあり今に至っています。だからレジェンドなどと言われてもこそばゆい…(笑)」

ー人々の意識は変わってきましたか?

●奈良：「一昨年の台風19号で江戸川区は新中川以西に避難勧告を出しました。学校等に避難することになりましたが、浸水しない清新町や臨海町に避難してきた人もいたので、みんなハザードマップを見ているんだなと。大型台風が増え防災的な危機感が気候変動とダイレクトに結びついてくれたらと思います。未来がある若い世代の方が不安だと思いますが、今だけ自分だけというジジババ世代が政治を動かしているからいかんですな」

●奈良：「私は発電所の運営をしながら足温ネットが防災面で地域に役立つ、地域の資源として見てもらいたい。そして、グリッドに頼るのをやめていかなきゃと。大電力を使う所だけグリッドを使えばよいのであって、家庭は高い電気料金で電気を買うのではなく、地域のエネルギー自給率を上げていきたいですね。風水害があっても浸水しない場所に小さな発電所を作れば、避難場所の電源になると思うのです。必要なのは大電力ではなくスマホの充電ができるような小さな電気なのです」

ー秋山さんの活動の原動力は何ですか?

○秋山：「自分を突き動かしているのは世の中の不公平や悲惨に対する怒りや悲しみです。気候変動で苦しむのは貧困に苦しむ人たちですし、途上国の人たちが多国籍企業の餌食になったり、コミュニティが崩壊したりすることに対する怒りや悲しみに『どうにかしなきゃっ』て思う気候正義が背景にあります。社会の汚い部分を見ることが学びとなって自分に蓄積されること、色々な方々とつながること、FFFで一所懸命活動する人から学べることも楽しいです」

ーFFFとして課題がありますか?

○秋山：「FFFにはすごく一生懸命活動する人ももちろんいますが、中には名前だけで実際の活動に出てこない人もいます。毎回出てくるメンバーが限られてしまっていて、人手不足になっています。メンバーとしてしっかり責任をもって活動できる人をいかに増やしていくかが課題だと思います」

ーどう思われます?奈良さん

●奈良：「でも運動でしょう、強制はできませんよね。10人のうち3人いれば世の中が変わるって言うじゃないですかー。私は全員が一斉に動くのは気持ち悪いと思ってしまう人なので、気持ちをシェアできる仲間がいて、話し合って進めていることでうまく動いています。一人じゃ疲れちゃうし、眉間にしわを寄せていたら人はしんどそうだと思ってついてきません。FFFでも名前だけの人も認め、大事にすることが大切じゃないでしょうか。動くメンバーを見ている人はいるし、秋山さんが忙しかったら手伝ってくれると思いますよ」

●奈良：「足温ネットのメンバーは多種多様で話し合っていると楽しいです。みんな仕事を抱えて夜や土日しか活動できないけど、ミッションを共有して、できるところでやる感じ。ここ数年新しい人が参加する一方で、パタゴニア丸の内ストアとコラボしたり、足温ネットが電気を売っているみんな電力には若いスタッフがいたり、つながりができつつあります。それは面白いし、いろんな情報も入ってきます」

ー足温ネットで自慢できる活動は何でしたか?

●奈良：「省エネゲームですね。最初は手づくりで、後に合同出版からゲームキットと共に出版されました。これは、今の生活を維持しながら家電製品等の買い替えによって苦労せずに省エネできることを気づくゲームなんですが、各地の地球温暖化防止活動推進センターなんかから講師依頼があって出かけました。北海道から沖縄までいかなかった県は無いんじゃないかっていうくらい」

●奈良：「本の印税やら講師料やら、まとまったお金が入ったので、省エネ型冷蔵庫への買い替えに必要なお金を無利子で融資する事業を始めました。買い替えた後に安くなった電気代で返済する仕組みで面白かったです。でも私たちの省エネ努力は、ジェット機が1回飛べば一発でチャラになってしまうので、そのことも訴えていかないといけません」

ー秋山さんはエネルギーについて意識することはありますか

○秋山：「一番近いところから変えようと、家族に省エネの必要性をこまめに言い聞かせたり(笑)、自分も電気の使い方にも気をつけたりしています。省エネに関しては、省エネ家電への買い替えや家の断熱とかが大事だなと思うんですが、それにはお金がかかって難しいですよね。でも、足温ネットの仕組みがあればやりやすいのではないかと思いました」

ー行政や政治も果たすべき役割があると思いますが

●奈良：「こうした仕組みづくりは、本来なら行政が動く話でしょ。ファミリーエスコ的に融資する制度ができればと思いますが、進まないのは声が上がらないから。

うるさいぐらいに言えば、行政はみんなのものなので動いてくでしょう。もうひとつは議員です。ヨーロッパで女性の政治家が軽やかに出産育児しながら活躍するのを見ていると、日本はまだまだオヤジ文化。自分も江戸川区議として8年務めました。背が高いのでオヤジ議員を上から見下ろして、怒ったりびびらせたり頑張ってきましたが(笑)、議会は多数決の世界なので、まだまだ保守的です。若い世代には『汚い・暗い』という政治文化に対するイメージの払しょくを期待しています」

○秋山：「政治っていってもほとんど男性で、しかも高齢化している感じじゃないですか。気候変動にあまり関心がなかったり脱炭素には原子力が必要だと言ったり…。もっと若い世代や女性といった、色々なバックグランドを持った人たちが議員になっていかないと、日本の社会は終わっていくなと感じています。トップだけの話し合いで全体の意見になっていくのは議会民主制が全然なっていないからだって思っていて、市民も賢くなってしっかり声をあげていかなきゃって思うんですけど、議員と市民がもっと歩み寄っていかないとも思っています」

●奈良：「議会っていうのは行政をチェックする機能として絶対的なものだから、そこに入り込んでいくのは大事な行動ですよね。一方で、議会とか行政に頼ってばかりでなく、自分たちで自治する―例えば電力会社からの独立運動とかしちゃうと、『えっ、私たちに電気買ってもらいたいの？じゃあ、原発止めなさいよ！』って言えるわけですよ(笑)。議会や行政も大事だけれども、そうじゃない活動も一緒にやらないと間に合わないですよね。それは若い人たちの力の方がすごくあるような気がするんです」

―FFFで政治に向かうメンバーは？

○秋山：「ちらっと聞いたことはあります直接政治とかに関わるっていうか、将来的には議員になって社会を変えていきたいって言っている人は結構聞きますね。ホープがいっぱいいるなって感じます」

●奈良：「でね、オールマイティーな活動をやらないといけないんですよ。議員って。『ごみを減らそう！水をおいしくしよう！』って言っていく他に、都市開発とか、土木とか、予算とか決算とか、全部をやらないといけない。合う、合わないはあるかもしれないけれど、私はすごい良い経験になったと思ってます。議員は交代で経験するとか面白いと思うんですよ。何期もやっちゃうと先生になってダメになってく人もいるので、難しいですけどね」

●奈良：「私は日本の官僚はものすごく頭が良くて、優秀な人たちの集まりで、頼りがいがあるとずっと信じてました。政策の方向性は違っているとはいえ、アホな政治家をうまく官僚がコントロールしてきたっていうか。でも今はそれもないですよね。忖度はするし、メモはなくすし…」

―日本の社会構造についてどう思われますか？

○秋山：「日本の構造にも問題あると思うんです。企業と官僚と政治の『鉄の三角同盟』の関係をしっかり断ち切らないといけないと思うんですけど、それは相当難しいと感じます。なので、足温ネットさんがやっているように、市民側から再エネとかを地域分散でやっていくとか、市民がもっと自立した結果最終的に日本の構造が変わるみたいな、周りからどんどん攻めていくというのは大切だと思います。なので、市民電力の活動はこれからすごく重要になってくるなって思います」

―鉄の三角って結構壊れつつあるような気がするんですけどどうです？

○秋山：「そうですね、今ダイベストメントが進んできて、FFFのメンバーもみずほ銀行とかにスタンディングとかしたりしているので少しずつ変わってきてはいるのかとは思うんですけどもー。世界ではESG投資とかも流行ってきてますし、銀行も賢い方が多いと思うので、ちゃんとシフトしなきゃって思っているんじゃないかなって感じます。でもまだまだだと思います」

●奈良：「欧米のような三つ目のセクターとしての市民社会が、日本の場合『第三セクター』として行政の下請けになっちゃった。本来市民が自分たちで主体的に社会を作っていくのが市民社会のはずですがNPO・NGOだけの小さな形になってます。けれど、これからは産業も変わっていかないと『いつまでもガソリン車作っていられないよあんたたち』ってなるでしょ。今ヤバイ時期なわけ。そういう時に若い人たちが未来をちゃんとイメージして、こういう世の中にするにはこういう風にしなきゃダメって言ってあげることが必要。最初に言ったように10人のうち3人が本当に気候正義を信じて未来を考え、『世の中はこう変化するから、この産業はこういう風に業態展開していった方がいいよね』って、企業を変えていくことだってできますよ。一生懸命技術を守ってきた先達たちを称えつつ、『このままじゃいかんよね、一緒に悩みましょうよ』ってね(笑)」

―江戸川区の企業の意識ってどうでしょう？

●奈良：「江戸川区って、中小零細の金属加工業が多いですよね。プラスチック製造業や繊維工場もあります。大企業よりも、中小零細企業の方が業態を変えていくにはフットワークは軽いわけです。どういう風に進めるか難しいことがいっぱいあるけれども、未来があるような気がしますよね」

―秋山さんは今後どんな進路を考えてますか？

○秋山：「私自身もっと学びたいなって思いが強くて、理系・文系が混合しているような国内外の大学院で、ヨーロッパとかで進んでいる政策とかについて学ぶのもいいのかなとー。これからは『公正な移行(Just Transition)』が必要になってくるなと思っていて、じゃないと中小企業も将来海外からバッシングを受ける懸念もあると思うんです。あと、すごく興味関心があるのが『ネイチャーテクノロジー』。自然の力を使っていかに災害を防いでいくか、人工のテクノロジーじゃなく、自然を主体においてっていうのを学んでいくのもすごくいいなと思っています。色々本当に学びたいものがあってどうしようって思っ

ているんですけれど」
○秋山：「今は、理系文系で分けてはいけないと色々な方が言っていると思うんですけれども、色んな問題を考えていくうえで、国際政治は国際政治、経済は経済みたいな感じに分けてしまうと、見える部分も見えなくなってくるというか、トレードオフ関係になってしまうので、包括的に見ていかないといけないと感じています。だからこそ理系・文系って分けずに色々なものを学べるような学部っていうのが求められているんじゃないかなって思っていて、そういったところで学んでいきたいなと思ってます」

ー秋山さんの周りの人の興味、関心は？

○秋山：「私のゼミが『ザ・環境』みたいな感じのところなので、環境に配慮しているような企業だったり、大学院だったりに行きたいと言っているメンバーもいます。SDGsって言っても、結構まだ資本主義感が残っている部分あるじゃないですか。なので人間中心じゃないSDGsを考えられているような企業とか探していたり、そこは皆さんすごく考えていますね」

ー活動を続けていくにあたって注意することはありますか？

○秋山：「そうですね。FFF自体は本来あるべきではない団体と言われていて、だから将来的には1・5℃目標とかを全部達成してちゃんと持続可能な社会を作ってから終息するのがゴールと聞いています。でも、まだ必要なのかなと思うので、興味を持ってもらう若者を増やしていくために、SNSとかをうまく活用しながら、しっかり若者をキャッチしていくっていうのは大事かなって思います。もちろん企業に就職してから社員向けに意識喚起を行ったりしているメンバー、草の根運動で活動しているメンバーもたくさんいます」
●奈良：「(足温ネットは)これまでは運良く気づいてくれた方が、新しいメンバーとして参加してくれたんですが、これからは難しいでしょう。もちろんフェイスブックページで発信してますが、そうした作業は事務局長個人に負担がかかっちゃって、サクサクやれる若い人が参加してくれたら違うかなっていうのはあります。これから足温ネットがどんな団体にシフティングしていくか、それにはメンバーがたくさんいたほうがいいに決まっているし、『次にお願いね』ってバトンタッチしていきたいのです。基本的には江戸川区ですから、地域の中で若い人たちとつながって、発信の方法や今のやり方でいいのかっていう評価も含めて考えていきたいですね」

ーこれからどんな活動をしていきたいですか？

○秋山：「FFFでもっと政府に呼びかけて、アメリカとかヨーロッパとかで今進んでいるグリーンニューディールの実現可能性を日本でも高めていけたらいいなと思いますが、自分ももっと学んで政策のヒントとかを政治家の人達に伝えていけたらなと思っています。自然と人間の分断が気候変動とかそういうものに最終的につながってきているのかなと思った時に、自然とのつながりとか、人と人のつながりもそうなんですが、見えないつながりをみんながもっと意識できる社会を形成できることが理想としてあります。だから、みんなが自然の大切さとかにしっかり気づいて、自然を大切にしていくことが、いかに色々な問題を解決できるかを知って欲しいなってすごく思っています」
●奈良：「新たな活動をしたいっていう欲みたいなのが枯れてきて…(笑)。でも、これまでに蓄積してきたものはあるわけで、それこそ秋山さん達のような今からやりたい人たちにつなげていくっていうのが、まずは大事ですよね」
●奈良：「日本人って議論が下手ですよね。ディスカッションして一つの方向を導き出すとか、その議論の中で生まれる豊かさを大事にして活動を続けるというか大きくしていくというか、なんかちょっと違ったらもう一緒にできない！みたいな。政党もそうじゃないですか、原水爆禁止運動とかもね、馬鹿だねって思いますよ。もっと緩やかにやっていれば、政府与党がこんな長期に国民を翻弄しないわけです。若い人たちの自殺も減らないし、安心とか安全がすごくスカスカになっていて、そういうところで一生懸命やっている人達も高齢化して、今のようなパンデミックの中ですごく危機感を持っているわけなんです」
●奈良：「秋山さんは文京区民だからちゃんと文京区の中で行政や市民に働きかけてますね。それすごくいいんです。なんかあったら自転車で駆け付けられる範囲で対話ができれば、子どもたちも『あ、大人たちは自分たちの社会のために一所懸命なんか楽しくしようとしている』って感じてくれるし、子どもは若いお姉さんやお兄さんの方が好きだし楽しんで学習できると思うんです。ジジババが諭すよりね」

ー今後のコラボレーションに向けて

○秋山：「FFFの中で、色々な情報を得ていかなくてはと思っています。もちろん大学の教授やNPO・NGOとのつながりも結構あるんですが、足温ネットみたいに活動している団体は少ないと思うので、経験値豊かな人たちと一緒に協力して何かをやっていくのは必要なんじゃないかなと思っています。現場を一緒に見ていくっていうのも必要な活動のひとつかなって個人的に感じています。色々経験豊かな方とプラットフォームみたいなのができるといいんじゃないかなって思いました」
●奈良：「それはもう、ぜひやっていきたい。まずは飲み会？今はできないか！(笑)定期的にミーティングみたいなのをやって、地域単位で今日の対談みたいに、課題を共有し合うっていうのがすごく大事だと思うんですよね。FFFで秋山さん達がどうゆう温度感でやっているかは会話しなければわからない。だから、そういう場をFFFの方から呼びかけたら断る団体はないと思うんですよね。私達はいくらでもやるし、一緒にできることがあればこれはコラボレーションしましょうっていうことになると思います。ぜひ対話を始めましょう。今日は本当にお会いできて良かったです」
○秋山「こちらこそありがとうございました」

えど・そら便り

足温ネットでは、2013年から太陽光発電による電力を固定価格で電力会社に供給する売電事業に参入しています。愛称は江戸川区と太陽光（ソーラー）をかけた「えど・そら」。1号機は10.5kW、2号機は 11.6kW、3号機は22kWの発電出力です。発電事業などについて報告します。

２０２１年第３回目の「えど・そら便り」です。今回は２０２１年７月までの実績について報告します。

表-1に２０２０年４月～２０２１年７月の月平均１日当たり発電量の推移を示します。５月と７月の実績はあまり良くなかったですが、去年７月のような極端な低下ではありませんでした。図-1に、えどそら1号、2号、3号の売電額（諸経費を除く）を示します。1号が年間約50万、2号は年間約66万円、3号は年間約91万円の割合で積み上がっています。

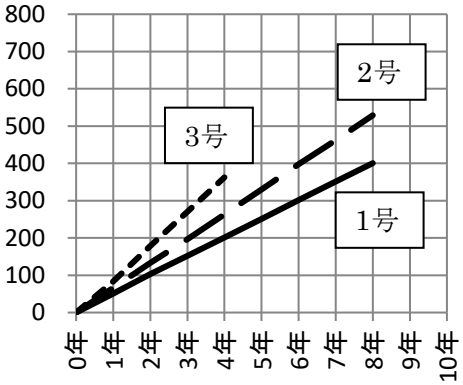
えど・そらプロジェクト以前から実施していた余剰買取り型である市民立第一、第二発電所について、ＮＰＯ法人太陽光発電所ネットワーク（ＰＶ―Ｎｅｔ）が実施している自家消費モニターの計測・通信装置を設置できるかどうか検討しています。第一は通信状況が悪く適さないことが判ったので、今後第二について検討を進める予定です。

（文責：柳澤一郎 理事）

表-1　1日当たり発電量　kWh/日

	えどそら1号		えどそら2号		えどそら3号	
	予測	実績	予測	実績	予測	実績
2020年4月	38.0	40.2	39.2	48.5	106.5	115.0
2020年5月	42.6	38.6	42.9	47.7	119.4	119.3
2020年6月	35.4	32.2	34.3	45.0	99.1	117.6
2020年7月	39.0	22.1	38.0	29.5	109.2	78.8
2020年8月	42.6	36.7	42.3	50.6	119.4	131.4
2020年9月	31.3	35.8	32.7	39.9	87.5	99.2
2020年10月	25.2	19.2	27.3	27.9	70.5	67.9
2020年11月	23.2	28.2	26.4	38.0	64.9	79.9
2020年12月	24.3	19.9	29.5	30.8	67.9	55.7
2021年1月	27.0	23.6	32.2	35.2	74.8	63.1
2021年2月	29.5	31.1	33.9	47.9	82.7	102.4
2021年3月	32.5	39.6	34.4	47.8	90.0	110.8
2021年4月	38.0	37.6	39.2	53.0	106.5	126.8
2021年5月	42.6	37.8	42.9	44.6	119.4	111.8
2021年6月	35.4	33.2	34.3	47.0	99.1	122.5
2021年7月	39.0	26.2	38.0	40.3	109.2	106.9

図－１　積算売電額



◆松戸そらぴか落成式に出席

さる7月3日、銀座環境会議「そらぴか落成式＆支援者交流会」に参加してきました。会場は松戸市にある教会「新松戸リバイバルチャーチ」です。松戸なのになぜ「銀座」なのか？代表を務める平野さん（当会監事）によると「都市住民を変える意味で、団体名に銀座を冠した」とのこと。同会議では、発電事業のほかに給水スポットをマップ登録する「リフィール松戸プロジェクト」を展開、ＳＤＧｓカードゲームや果樹の植樹も実施しています。

元々国際協力ＮＧＯに参加しラオスで農村開発活動に従事してきた平野さんは「松戸を暮らしやすいラオスのような町にしたい」との思いがありました。そして、教会での学習支援活動が縁でＰＰＳ方式での太陽光発電所の設置を提案し、賛同を得ました。ＦＩＴ制度による買取価格が下がり、災害リスクが高まる中で自家消費が合理的ではないかとの考えからです。

発電所の名前は、空から見たときにパネルがピカピカ見える様子を表現して「そらぴか」と命名。太陽住建が施工業者となり、ドイツ製の太陽光パネル48枚（14・88キロワット）を市民参加で設置、電力会社より安い価格（再生可能エネルギー賦課金を支払わない）で教会に売電し、使い切れない分は電力会社に売ります。14年で設置コストと撤去コストを回収できたら、教会に売る電気代を下げ第三者所有を続ける予定です。教会は災害時に地域の充電ステーションになり、売電収益は子ども支援団体に寄付するつもりだそうです。

教会の屋上に上がって発電所を見学した時に、足元に気を付けるよう言われたのでよく見てみるとパネルの上にテグスが縦横に張ってありました。何でもカラス除けとのこと。テグスが太陽光で光るからではなく羽が傷つくのを恐れて近づかないのだそうです。

平野さんによると、市内の建物所有者から問い合わせもあり、今後も第二、第三の発電所を計画していくとのこと。ぜひ、応援していきたいと思います。

（文責：山﨑求博　事務局長）

毎週水・木・金曜日配布　購読料無料　ポスティング

ちいき新聞

2021年6月25日号
新松戸・北小金版
第1面No.1985
vol.937　全4面
総発行部数2,014,000部

今週の見どころ
☆ラクボママ・お片付けコラム
☆お楽しみ！読者プレゼント
☆今週の感謝メッセージ
☆オリジナルソング配信

LINEおりエイターズスタンプに登場！
120pt発売中！
「ちいきっぷ」で検索！

松戸初の市民発電所が完成

松戸そらぴかプロジェクト

「松戸そらぴかプロジェクト」は、松戸市内の施設の屋根に太陽光パネルを設置し、地球温暖化の防止と災害に強いまちづくりを目指すプロジェクトだ。今年4月には、市民発電所第1号が市内に設置された。

環境・エネルギー
８行ニュース

※報道記事を抜粋したものです

●「共創会議」福井・敦賀で初会合
（2021.6.22 日刊工業新聞）
経済産業省・資源エネルギー庁は 21 日、福井県敦賀市で、「原子力発電所の立地地域の将来像に関する共創会議」の初会合を開いた。福井県の杉本知事と立地の４市町の首長、関西電力と日本原子力発電の社長、資源エネルギー庁の保坂長官らが出席した。杉本知事は福井県を拠点に日本海側の水素サプライチェーンを形成する新たな案を提言した。

●環境省、地域脱炭素へ局長級ポスト新設
（2021.6.24 日経新聞）
環境省は 7 月 1 日付で局長級の新役職を設置し、地域脱炭素ロードマップを実行に移す。100 カ所以上の地域で再生エネの導入を進め、5 年で複数の脱炭素先行地域を生み出す。複数年度にわたって自治体を包括的に支援する新たな交付金制度をつくり、30 年までに自治体の公共施設や土地の半分に太陽光パネルを設置し再生エネ電力の自家消費を進める。

●カナダ、熱波で 134 人が突然死
（2021.6.30 日経新聞）
カナダの放送局 CTV は 29 日、西部バンクーバーとその近郊で 25 日から計 134 人の突然死が警察に報告されたと報じた。ほとんどはカナダ西部を先週末から襲っている熱波の影響で、多くは高齢者だという。熱波は米西部も襲っており、西部ワシントンとオレゴンの両州では 25 日から 29 日にかけ、熱中症などで計 1100 人を超す人が病院で治療を受けた。

●「修理する権利」を保証する法律を施行
（2021.7.2 Gigazine）
英政府が７月１日付で「Right to Repair（修理する権利）法」を施行した。この法律は修理業者が自力で修理を行えるように製造業者にスペアパーツの販売を義務づけるものだが、対象製品が少なく、特にスマートフォン等ハイテク製品が対象外となっている点が問題として大きく報じられた。EU は３月に「家電メーカーに修理受付を義務づける法律」を可決している。

●みんな電力、発電事業に参入
（2021.7.6 日経新聞）
みんな電力は、農地の上に太陽光パネルを設置するソーラーシェアリングで発電事業に参入する。このほど、発電事業を手掛ける子会社のみんなパワーを設立した。第１号案件として岡山県玉野市に営農発電の「原木シイタケ太陽光発電所」を稼働させた。自ら発電を手掛け販売用電力の調達や収益の安定化につなげる。FIT を利用しない発電所の開発も手掛ける。

●東電株主裁判で旧経営陣が証言
（2021.7.6 NHK）
福島第一原発事故をめぐり安全対策を怠ったとして、旧経営陣５人に会社への賠償を求めている裁判で６日、旧経営陣４人の尋問が行われた。勝俣元会長は国の地震調査研究推進本部の「長期評価」や巨大な津波が押し寄せる可能性があるとした想定等について「知らなかった」と繰り返した上で「事故を招いたことは痛恨の極みで、深くお詫び申上げる」と謝罪した。

●祖父母が経験しない異常気象　孫世代は
（2021.7.10 毎日新聞）
このまま気温上昇が進めば、子や孫の世代はどれほどの大雨や猛暑に直面することになるか。そんな疑問に答える予測結果を、国立環境研究所等のチームが環境科学専門誌で発表し た。日本では、1960 年生まれの世代が一生遭遇しない大雨をその孫は３回程度経験し、異常な暑さには計約 400 日もさらされる可能性があるという。

●宇都宮市が新電力会社設立
（2021.7.14 毎日新聞）
宇都宮市等は 13 日、同市役所で記者会見し、地域新電力会社「宇都宮ライトパワー」を設立したと発表した。市内のバイオマス発電等で作った電力を買い取り、市有施設や 2023 年 3 月開業予定の LRT に供給する。市が 51％を出資し、NTT アノードエナジー、東京ガス、足利銀行、栃木銀行が残る 49％を出資する。代表取締役には酒井副市長が就いた。

●太陽光発電施設に土砂災害リスク
（2021.7.18 NHK）
国立環境研究所が航空写真などから割り出した、出力 500kW 以上の中規模施設の位置データと土砂災害リスクの地図データとを重ね合わせて分析した。災害リスクのある「土砂災害危険箇所」と一部でも重なっていた施設は全国で全体の 1 割超、少なくとも 1,186 か所にのぼり、このうち 249 か所は特に危険性の高い「土砂災害特別警戒区域」と重なっていた。

●「国境炭素税」米議会でも議論始まる
（2021.7.20 日経新聞）
環境規制の緩い国からの輸入品に事実上の関税を課す「国境炭素税」の議論が EU に続き、米議会でも始まった。バイデン大統領に近いクーンズ上院議員は 19 日、同党の下院議員と共同で、2024 年 1 月から「国境炭素調整」を導入する法案を公表した。CO2 排出規制が緩い国や地域から製品を輸入する際、製造時に排出した CO2 に応じて関税を課す。

●返礼品に地元産「電気」も　総務省
（2021.7.24 共同通信）
総務省は、太陽光や風力などの再生可能エネルギーで生み出した電気も地場産品として返礼品にできると全国の自治体に通知した。電気の供給契約時に「地元で発電した電気」と“産地表示”することが条件。返礼品に加えることで再生エネ導入を後押しし、地域の脱炭素化につなげる狙い。自治体が提供する返礼品は「寄付額の 30％以下の地場産品」と定められている。

●原発建て替え、素案に明記せず
（2021.7.28 朝日新聞）
新たなエネルギー基本計画の素案で原発の建て替えや新増設が明記されなかったことをめぐり、自民党内から不満の声が上がっている。自民党総合エネルギー戦略調査会 28 日の会合では、脱炭素社会の実現に向け原発の位置づけを明確にするよう求める意見が相次いだ。会合では「選挙後にきちんと議論すべきだ」との意見もあったという。

●全国初「交通税」導入へ議論本腰
（2021.7.30 京都新聞）
滋賀県が創設を検討している「地域公共交通を支えるための新たな税制」（交通税）について、三日月知事は、課税方式などを今秋をめどに県税制審議会に諮問することを明らかにした。人口減少や新型コロナウイルス禍で県内の地方鉄道や路線バスが存続の危機にあるとの認識から、これらの維持・利便性向上へ新たな税財源の確保を検討している。

●原発 11. 7 円以上で太陽光上回る
（2021.8.3 朝日新聞）
経済産業省は３日、電源別の発電コストの試算について詳しい数値を公表した。原発は 2030 年時点で 1kWh あたり「11.7 円以上」となり、前回 15 年の試算より 1.4 円上がった。安全対策費や事故時の賠償費用などが増えたためだ。最も安かったのは事業用太陽光で、「8.2 円～11.8 円」だった。太陽光のコストが原発を将来下回る見通しが固まった。

●原因は人間の活動と初めて断定
（2021.8.9 朝日新聞）
国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は９日、地球温暖化の科学的根拠をまとめた作業部会の報告書の最新版（第 6 次評価報告書）を公表した。今後 20 年以内に産業革命前からの気温上昇が 1.5 度に達する可能性があるとし温暖化の原因は人類が排出した温室効果ガスであることについて、「疑う余地がない」と従来の表現より踏み込んで断定した。

●新築住宅の省エネ義務、25 年度から適用
（2021.8.10 日経新聞）
政府は 10 日、住宅・建築物分野の省エネルギー対策の工程表を示した。国土交通省などによる有識者会議が報告書案をまとめた。改正建築物省エネ法は、延べ床面積 300 ㎡以上の新築のビルや商業施設に対し省エネ基準を守るよう義務づけている。新たに住宅や小規模ビルにも対象を広げるため法改正をめざす。省エネ性能の表示制度も整える。

●メガソーラー開発の再検討を国に要請
（2021.8.12 しんぶん赤旗）
山間部のメガソーラー発電計画に反対している福島県相馬市の市民有志の会は 10 日、計画許可の再検討をオンラインで国に求めた。事業会社の創業者は、熱海市の豪雨災害で崩落した盛り土を含む土地所有者の麦島善光氏。同社側は住民説明会で災害時の被害補償などの問いに納得できる回答をしていない。林地開発を許可した県も約束した文書回答をしていない。

●東海再処理施設の廃止作業 2 年ぶり再開
（2021.8.16 朝日新聞）
日本原子力研究開発機構は 16 日、東海再処理施設（茨城県）の廃止作業の一環として、高レベル放射性廃液をガラス固化作業を 17 日に再開すると発表した。機器トラブルのため、約 2 年間中断していた。完了まで 70 年、少なくとも１兆円の費用を見込む工程への影響はないとしている。19 年 7 月にガラス固化作業をいったん再開したが、月内のうちに中断していた。

●環境省、太陽光パネル調査費用を補助
（2021.8.20 日刊工業新聞）
環境省は 19 日、自治体に対し庁舎や学校などへの太陽光パネルの設置を促すため、必要な事前調査の費用を新たに補助する方針を固めた。2022 年度予算概算要求に関連経費を盛り込む。政府は６月、国内の公共施設への太陽光パネル設置率を 30 年に約 50％、40 年に 100％とする目標を設定しており、実現に向け自治体を後押しする。

●再エネ導入、脱炭素交付金に200億円
（2021.8.23 時事通信）
環境省は、再生可能エネルギーの導入など地球温暖化対策に積極的に取り組む自治体への支援を強化するため、2022 年度に「地域脱炭素移行・再エネ推進交付金」を新設する方針を固めた。同年度予算概算要求に 200 億円を盛り込む。対策事業への補助率は 1/2～3/4 とする考え。自治体の財政負担を軽減するさらなる支援も検討している。

●本号の対談企画がテレビ取材を受ける！

～MXテレビ『堀潤のモーニングFlash夜のZ議会』

オフグリッドハウス松江の家でZ世代との対談企画が行われた8月2日、撮影するテレビ局クルーの姿がありました。

番組名は「堀潤のモーニング Flash」。東京ローカルのテレビ局「MXテレビ」が放映する朝の情報バラエティーで、日替わりでZ世代のコメンテーターが登場します。今回、気候変動に焦点を当てた特番を組むので、取り組み事例として取材したいとの依頼がありました。ちょうど対談を行う日が放映日に近く、対談の前に発電所や松江の家の見学を行うことになっていたのでテレビ局側の好都合ということで取材に応じました。

当日は、見学から対談企画、その後の奈良代表理事からのコメント取材まで、ほぼ半日お付き合いいただきましたが、どんな風に取り上げてもらえるのか気になっていました。対談の様子もずっと撮影し、対談相手の秋山さんに名前や年齢を確認していたからです。

そして、放映日の8月6日。番組には、国際会議から帰国し自宅待機中の小泉環境大臣がリモートで出演し、気候変動対策についてZ世代と議論を重ねていきます。足温ネットの取り組みもコンパクトにまとめていただきました。MCの堀潤さんからコメントを求められた小泉大臣は、「江戸川区での取り組みは、これからの未来の当たり前を実現しているケースですよね」と評価していただきました。

とても得るものがあった取材でした。MXテレビさん、ありがとうございました。

（文責　山﨑求博・事務局長）

番組取材を受ける奈良代表理事

本号の対談企画も取り上げていただきました！

活動日誌

5.08　総会議案書発送
5.13　『あしもと通信 Vol.99』発送
5.22　足温ネット2021年度定期法人総会。役員人事で、平野さん（銀座環境会議）が監事に就任
　　●第2回運営委員会
5.29　えどがわエコセンター第18回総会に出席
5.31　エコメッセ元気力発電所江戸川店が閉店
6.06　江戸川区が「環境フェア 2021 オンライン」を公開
6.17　福島原発放射能汚染水放出計画対応日中韓市民社会フォーラムに参加
6.19　大久保俊亮さん（北海道大学経済学部3年生）からインタビュー
6.21　気候ネットワーク総会に出席
6.23　●第3回運営委員会
6.24　ストップフロン全国連絡会総会に出席
7.03　銀座環境会議「そらびか落成式＆支援者交流会」に参加
7.06　えどがわエコセンター理事会に出席
7.09　松江の家パネル増設等の打ち合わせ
7.22　松江の家パネル増設等に関する下見
7.28　●第4回運営委員会
8.02　あしもと通信 Vol.100 記念企画対談を実施→MXテレビ取材
8.06　◇MXテレビ『堀潤のモーニングFlash夜のZ議会』放映
8.08　◇「Planet Rock TV」（松戸市議DELIさん動画配信）に平野監事が出演
8.16　●第5回運営委員会
8.21　出講打ち合わせ（千葉県松戸市）
9.16　●第6回運営委員会

編集後記

私たちのような市民活動における事務作業は、禅寺における「作務」に似ていないだろうか。畑仕事や食事の調理といった作務は修行の一環で疎かにできない。これは事務作業も同じだ。例えば、ニュースレターの発送で封筒に宛名シールを貼る作業。印刷時にインクのついた手で触った封筒が汚れたり、宛名シールを貼る位置がずれたりする。しかし、宛名シールがずれ、汚れがついた封筒を受け取った会員はどう思うだろう…。そう思うと疎かにはできない。インクで汚れた手は洗い、シールは両手を添えて貼る、こうした手間が活動を支えている。かつて、ある市民活動家はこう言った。「運動ハ即チ事務ナリ」と。蓋し名言だ。事務作業こそ、まさに作務なのである。そして、今日も事務局は作務ならぬ事務作業に向き合う。（M・Y）

足元から地球温暖化を考える市民ネットえどがわ　東京都江戸川区東小松川 3-35-13-204　info@sokuon-net.org